新たな風

広響プロ改組35年

(上)

手を結ぶ「P3」

三重奏 魅力高め合う

未来の聴衆獲得に手応え

広島市中区の広島厚生年金会館ホール。ベートーベンの交響曲第七番の華やいだ一節が何回も流れた。テレビドラマ「のだめカンタービレ」で知られた第一楽章だ。広島交響楽団のコンサート前のひとこと。弦楽合奏を指揮したのは小学生だ。

広響、広島東洋カープ、サンフレッチェ広島ー。広島を本拠に活動する三つのプロ組織（P3）が連携する「P3 HIROSHIMA」が開いた、夏休み小学生体験授業の一幕だ。指揮体験のほか、開演前に来場者を出迎える受け付けの手伝いやステージ見学をした。プロ奏者を前にタクトを振った五人は「多くの音をまとめて一つの曲にするのは大変」と、オーケストラのすごみを体感した。

このP3は、五月の共同記者会見から始まった。「広島に誇り、情熱、期待を感じさせる存在に」「地域に新たな風を起こしたい」。分野の違うプロ三者が地域活性化に協力して取り組むのは、全国でも珍しい。

♪ ♫

事業は①招待（体験）②小学校訪問③社会慈善事業支援ーが柱だ。

呉市では定期演奏会の前に、元カープ監督の阿南準郎さんや広響のコンサートマスター、田野倉雅秋さんらによるトークショー「チームワークはプロの魂」を行った。社会活動は、広島県や民間団体と協力し、乳がん撲滅のピンクリボンや児童虐待防止を訴えるオレンジリボンキャンペーンを支援した。

連携して半年間。事務局を驚かせたのは、演奏会や試合に招待した大学生や小学生の好反応だった。亀山南小五年、武田優希君(11)は初めての広響体験を「たくさんの楽器のコンサートを見て感動しました。手がいたくなるくらいみんなずっと拍手をしていました。広島ってすごいと思いました」と感想をつづった。

市内三大学の五十人からは「直接感じる音に鳥肌が立った」「街に三つのプロがあるって、実はぜいたくなこと」「県民の誇り。ファンになった」と声が寄せられた。

広響の大野事務局長は「多くの人が知らなかっただけ、と分かった。地味だが将来のファン獲得にもつなげていけそう」と手応えを感じた。

サンフレッチェ広島の事業推進室、森脇豊一郎課長も同意見だ。「試合や演奏会の共通点はライブ。若者の意見から、会場に足を運んでもらう知恵も生まれる」とみる。

反響は広島だけにとどまらない。「東京在住の広島出身者がP3をネットで紹介している。故郷のチーム、オケが何か始めてるよ、と呼び掛けてくれた。魅力を全国にアピールできる活動をしたい」と意気込む。

♩ ♬

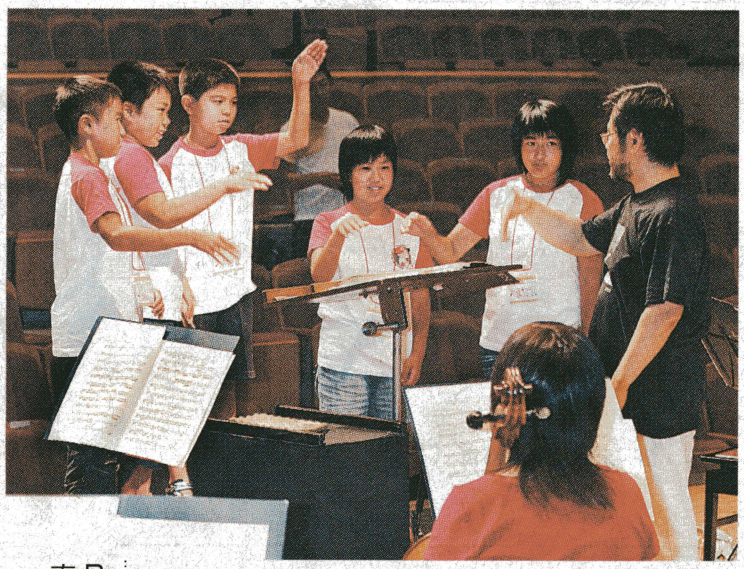
広島東洋カープの関谷康地域担当部長は「これからですよ」と話す。「選手のフリーエージェント(FA)宣言で揺れるカープ。J1残留が心配なサンフレ。資金難に苦しむ広響。ファンの支えあっての団体という同じ立場でもある」。手弁当で集まる月一回の三者会議を続け「地道に息長く」事業に取り組む構えだ。

広響にとってP3がもたらす効果は大きい。巨大なファン人口を持つカープ、サンフレに比べ、情報発信力の差は否めなかったからだ。

「CDでは味わえない感動がある」と五年前から演奏会に足を運ぶ、広島市立大二年の原田ひかるさん(20)。「のだめブームで、最近は同世代と広響の話をしやすくなってきた。今がチャンス。P3で若い人に聴くきっかけを広げてもらえれば」と期待を込める。

◇

広響がプロ楽団になって、今年で三十五年。「Music for peace」をキャッチフレーズに掲げ、地域に根ざした活動に取り組む。広響に吹き始めた新たな風を見つめる。（片山明子）



P3の体験授業で、指揮の仕方を教えてもらう子どもたち（8月、広島厚生年金会館）

新たな風 広響プロ改組35年 ㊥

支えるかたち

ファンと行政が両輪

存在意義の浸透に課題

九月末、秋色濃い仙台市に、全国五つの都市から音楽好き約五十人が集まった。全国組織「日本プロオーケストラファンクラブ協議会」の第一回総会にやってきた五団体のメンバーである。

仙台フィルハーモニー管弦楽団を支える「仙台フィルハーモニークラブ（SPC）」、札幌交響楽団の「札響くらぶ」、山形交響楽団の「山響ファンクラブ」、群馬交響楽団の「群響を応援する県民の会」、広島交響楽団の「広響フレンズ」だ。

一行は、仙台フィルの定期演奏会を聴いた後、交流会に臨んだ。交流会には梅原克彦仙台市長も出席し「音楽で地域活性化を」と盛り上げた。

「ファンクラブ協議会」は①音楽文化に貢献するプロオーケストラを支援②ファン団体の交流③オーケストラの存在意義を地域に定着させる―などを目標に船出した。

♪ ♫

協議会会長は、札響くらぶ会長の上田文雄札幌市長。「どの都市も財政は厳しい。オケの努力や存在意義を伝えないと、市民の理解は得られません」と、ファン同士で支える知恵を出し合う必要性を説いた。

総会では各団体が活動報告。自主コンサートを開く（仙台）▽楽譜購入に年間五十万円を楽団に助成する（札幌）▽楽団員もメンバーに加わる（群馬）―など、個性的な活動が目を引いた。

「どこも運営には苦心してるなあ」。広響フレンズの歴史や楽団員との交流ぶりを紹介した、広島市東区の佐藤幸一さん(58)。「それぞれ立場や組織は違うが、腹を割って相談できる仲間に出会えた」と話す。

広響フレンズは、財政危機を迎えた一九九八年、支援組織として広響事務局が設立。年会費三千円。いわば、財政を支える会員制度を増やす狙いだった。

現在、会員は約四百人。ボランティアのスタッフ十人が活動の中心だ。楽団員のインタビューを広響の会報に掲載し、ユニークな交流会もする。地道に実績を重ねてきた。

一方「イベントには参加しても、演奏会で見る顔は少ない」と佐藤さんは気に掛ける。フレンズ会員はチケットが二割引きだが、定期演奏会などで特典を利用した会員は一公演平均二十三人（昨年度）。一度も来ない人も相当数いるとみられる。

「寄付感覚でなく、本当の支援につなげる活動にしたい。やれることはまだ多いね」

♩ ♬

地方オーケストラの運営は、国や自治体の助成なしには難しい。広響も年間支出約六億六千万円（昨年度）のうち、約三億二千六百万円（国が九千六百万、県が一億二千万、市が一億一千万円）の助成を受けている。

地方自治体からの助成額に限ると、似た規模の札幌、仙台、福岡が三億―三億七千万円に対し、広島は二億三千万円とやや少ない。

なかでも手厚いのは仙台だ。市だけで仙台フィルへの助成は約三億円。「楽都（がくと）構想」を掲げ、オーケストラを「町の文化ソフト」と位置づける仙台市は、音楽イベントを次々に催し、知名度アップに活用する。

また、札幌交響楽団では定期公演を増やし、小学生を招待するなどの文化的社会貢献が市の助成策を安定させ、経営危機から脱出しつつある。ファン団体の市への提言も後押しした。

広響も広響フレンズだけでなく、女性を中心にした私設の市民応援団「ミュージック・パーティ」が活動を始めている。同じプロ組織として広島東洋カープ、サンフレッチェ広島と連携する「P3」事業も始めた。

「それぞれが、オケと市民をつないでくださる存在」と広響の大野英人事務局長。広響独自の努力に加え、行政の協力、そして活発な市民の支えが新たな広響のページを開いていく。

（片山明子）

「日本プロオーケストラファンクラブ協議会」の総会で、広響フレンズを紹介する佐藤さん（9月、仙台市青葉区のハーネル仙台）

訂正 27日付記事で、夏休み小学生体験授業のあったコンサート会場は、アステールプラザでした。

新たな風

広響プロ改組35年 ㊦

次のステージ

「地域カラー」深めて

人材育成ですそ野拡大

「力を付けてきた。全国の地方オーケストラの方向性を見る上でも注目株」。音楽評論家の雑喉潤・尚美学園大学院客員教授は、広島交響楽団を聴きに年数回は広島を訪れる。「個性的な企画がいい。楽団員がソリストを務める演奏会も増えて、良い影響を与えてます」

♪ ♫

市民楽団がプロとなって三十五年。広響は特色あるプログラムや地元に根ざした音楽づくりに力を注ぐ。

秋山和慶音楽監督の「ディスカバリー・シリーズ」は六年目。昨年から古典派二人を紹介する「モーツァルト&ハイドン」で、基礎に立ち返った。演奏がまれなマーラーの大曲や北欧諸国の現代曲も定期演奏会で挑み、技量を上げている。

この十八日、指揮者井上道義企画の「ショスタコーヴィチ交響曲全曲演奏会」に招かれ、東京・日比谷公会堂で演奏した。「戦争をテーマにした曲を広島のオーケストラで」との趣旨。広島での壮行演奏会は白熱し、東京まで聴きに行った人もいた。

成果の一方、整備すべき課題もある。不安定な財政と楽団員の雇用問題…。日本音楽家ユニオン・広響の松崎祐一代表は「夢を抱き、全国から広響入団を目指す若者が増えている。現実は厳しいが、モチベーションを保てるようにしないと」。事務局との協調も含め、何でも口に出せる信頼関係をつくろうと努める。

秋山さんは「団塊世代が定年を迎え、人の出入りが激しくなった。過渡期だ」と話す。年に約百二十回と公演は増えてきたが「弾いてなんぼ。楽団員の協力あればこそですよ」。

広島市の協力で八年前に専用練習場はできた。次の目標は「広響らしい音づくり」。音響的に満足できるホールが欲しい。秋山さんは「音楽ホールは広響と市民の楽器」と、将来的な整備を訴えるつもりだ。

地域の大学や音楽教室で人材育成に尽力する楽団員は多い。第二バイオリンの長谷川夕子さんも、多くの演奏家を育ててきた。昨年、パガニーニ国際コンクールで三位に輝いた正戸里佳、NHK交響楽団の田中晶子、大阪フィルハーモニー交響楽団のコンサートマスター長原幸太…。広響に入団した教え子もいる。

「広響が一つの目標となり、また、羽ばたいた教え子が帰りたくなるような存在に」と長谷川さん。正戸さんたちとの協演を楽しみにする。

♩ ♬

楽譜を担当するライブラリアン松田弘美さんは、プロ改組三十五年の記念事業として広響の歩みを振り返る記念誌づくりに携わる。日常業務の合間をぬって、市民楽団時代からの歴代指導者を取材している。

改組当時の二代目理事長は、被爆者医療に尽くした原田東岷さん。亡くなる前、医師や経済界の友人に「広響を頼む」と伝えていた。そんな歴史を知って松田さんは「被爆で傷ついた市民の心を音楽で癒やしたい。先輩たちはそう願っていた」と思う。「広響の原点は平和を願う心にあると、気づかされました」

広島市出身でNHKの音楽ディレクターを務め、N響の運営にも携わった原武・サントリーホール総支配人（東京都）は、「東京と同じやり方をしていては駄目。地域カラーにこだわって」と提言する。

広島放送局時代、原さんは川や瀬戸内海、平和といった広島らしい切り口を、番組や音楽に結実させた。「広島は吹奏楽や合唱が盛ん。広響が音楽好きの若者と結び合えば、サポーター育成にもなる」

サントリーホールでは、人気漫画「のだめカンタービレ」のドラマ収録があった時、二千人もの若者が詰め掛けた。「潜在のファンは必ずいる。振り向いてもらう工夫を続けましょうよ」

広響は一九六三年結成の広島市民交響楽団が出発点。中四国唯一の実力あるプロオーケストラに成長した。「音楽は愛や平和を想起させる。広響は地域に欠かせない存在になってほしい」と、原さんはエールを送った。

（片山明子）

井上道義企画・指揮の「ショスタコーヴィチ交響曲全曲演奏会」で、交響曲第９番を熱演する広島交響楽団　（18日、東京・日々谷公会堂）